公益社団法人　日本図書館協会　図書館情報学教育部会

# 会　　報　第125号

2019（令和元）年5月21日発行　編集・発行　図書館情報学教育部会　（ISSN 2189-6194）

目　次

2018年度　第2回研究集会（2019年3月17日（日）開催）の報告……1

**テーマ：教育プログラムの組み立て方―「情報サービス演習」を例として―（図書館情報学教育FDプログラム）**

趣旨説明　情報サービス演習の変遷

（大谷 康晴　日本女子大学，図書館情報学教育部会幹事）……2

事例報告　「情報サービス演習」の構成モデル―青山学院大学における取り組み―

（小田 光宏　青山学院大学，図書館情報学教育部会長）……3

事例報告　図書館職員による「情報サービス演習」―九州大学における事例―

（渡邊 由紀子　九州大学，図書館情報学教育部会幹事）……5

事例報告　「情報サービス演習」のあり方―中央大学における取り組み―

（小山 憲司　中央大学，図書館情報学教育部会幹事）……8

ワークショップ（概要）……10

参加者の感想　情報サービス演習の課題とこれから

（髙田 淳子　獨協大学等非常勤講師）……15

参加者のアンケートから……16

## 2018年度　第2回研究集会の報告

**日　　時**：　2019年3月17日（日）14時15分から17時20分

**会　　場**：　日本図書館協会会館 2階研修室（〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14）

**参加者数**：　22名（うち，部会員11名）

現在の省令科目「情報サービス演習」は，旧カリキュラムの「情報検索演習」と「レファレンスサービス演習」を1つにし，通年（60 時間）相当の科目として設定された。紙やデジタルという媒体ごとに分けるのではなく，両者の一体化を構想していたが，旧カリキュラムからの移行の問題もあり，「情報検索演習」と「レファレンスサービス演習」の科目名称のみ変更して対応した大学も多かったことと思われる。

そこで本研究集会では，「図書館情報学教育 FD プログラム: 教育プログラムの組み立て方―「情報サービス演習」を例として―」と題して，科目内容の整理を試みるとともに，具体的な科目としてどのように提供していくかを検討した。大谷康晴氏（日本女子大学）の趣旨説明に続き，小田光宏氏（青山学院大学），渡邊由紀子氏（九州大学），小山憲司氏（中央大学）の3名から，各大学における取り組みについてそれぞれ事例報告を受けた。これらの報告も参考にしながら，参加者が5グループに分かれて，各自の実践事例について意見

交換し，全体発表を行った。

なお，本研究集会は，日本図書館協会図書館情報学教育部会による「図書館情報学教育 FD プログラム」として開催した。プログラム終了後，部会員の参加者には同プログラムの修了証を発行した。

＜趣旨説明＞

## 情報サービス演習の変遷

大谷 康晴

（日本女子大学文学部）

### 1. 1996 年：「情報検索演習」の成立

1996 年に公表された生涯学習審議会社会教育分科審議会による『社会教育主事，学芸員及び司書の養成，研修等の改善方策について』でいわゆる司書講習の省令科目として初めて「情報検索演習」が設定されるようになった。この報告では，“今日の情報化社会に対応するため，「情報サービス概説」，「情報検索演習」を設置し，情報関係科目の充実を図る”[1]としている。この結果，講義科目として「情報サービス概説」が設定されているのに対して，演習科目としては，「レファレンスサービス演習」「情報検索演習」の二本立てとなった。

このような構成は，「情報検索演習」を行うための当時の大学における演習用の PC 教室の整備状況が不十分である，あるいは大人数の PC 教室がなく「レファレンスサービス演習」と一本化していても情報検索の部分だけ環境を変えないと授業を運営できない等の事情があったと考えられる[2]。

**大谷康晴氏**

### 2. 2012 年：「情報サービス演習」の施行

そして，現在の省令科目（ただし，「大学において履修すべき図書館に関する科目」として設定されたことになるが）では，「レファレンスサービス演習」と「情報検索演習」は統合されて「情報サービス演習」となった。この点について科目内容を検討した図書館の在り方検討協力者会議では，“発展的に統合するものとして「情報サービス演習」を新設”するとしている[3]。

この会議では，同時に“図書館サービスについては，レファレンスサービスの体制作りと質的向上，最近注目されている課題解決支援サービスや発信型情報サービスが重要である”とも述べている。実際新旧の科目内容を比較してみると「情報サービス演習」は旧来の 2 科目を単純に一つにしたものではない。

しかしながら，現行の省令科目は，2010 年に旧カリキュラムがそのまま「大学において履修すべき図書館に関する科目」となり，さらに 2012 年に科目構成が現行のものに移行するという複雑な移行プロセスをたどった。各大学では，旧来のカリキュラム（2011 年度まで入学者対応）と新カリキュラム（2012 年度以降入学者対応）の両方を運営しなければならなかった。この結果として，新カリキュラムに対応するよう一部手直しをしたとしても，基本的には旧「レファレンスサービス演習」と旧「情報検索演習」をほぼそのまま開講し，両者を併せて新「情報サービス演習」の履修となる形で科目編成を行った大学も多かったと思われる。

また，旧「レファレンスサービス演習」は比較的紙媒体よりの探索についての演習，旧「情報検索演習」はコンピュータを活用した探索の演習と性格が分かれていたため，得意とする領域が異なる教員がそれぞれ担当することも多かったと思われる。このような状況でいざ科目統合となっても，にわかには判断を付けられないことも多く，結果として各大学に旧来の 2 科目をそのままの形で開講させることを促したといえる。

### 3. 2019 年：新しい「情報サービス演習」の可能性

さて，現在（2019 年 3 月）は，旧カリキュラム施行時に入学してきた最後の学生（2011 年 4 月入学）の在学年限の最終年が終わろうとしている時期である。つまり，旧カリキ

ュラムと現行のカリキュラムの双方を見ながら運営する状況から解放されることを意味する。

同時に，教員や設備面での過去からの制約やしがらみからかなり自由になっているだろう。また，紙媒体とコンピュータという探索の手段の違いで授業科目を分割することにもいよいよ無理がある状況になっている。

以上の点を考えると，今こそ，「情報サービス演習」という科目に向き合い，各大学が実現したい教育内容という観点から授業提供の手法を検討する時期に差し掛かっているといえよう。今回の研究集会では，このような問題意識に立って，いくつかの事例について報告してもらった後，ワークショップを行い，新しい「情報サービス演習」の展開の可能性を広げていき，参加者の所属大学での教育に反映してもらえれば幸いである。

**注（URL は，全て 2019 年 4 月 22 日確認）**

1) http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19960424001/t19960424001.html

2) この点については，当日小田光宏図書館情報学教育部会長より，目に見える改正点として「情報検索演習」という科目純増が決定されたという当時の政治的な事情についても補足が行われた。

3) 図書館の在り方検討協力者会議. 司書資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目の在り方について（報告）. 2009. http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2009/09/16/1243331_2.pdf

＜事例報告＞

## 「情報サービス演習」の構成モデル―青山学院大学における取り組み―

小田 光宏

（青山学院大学教育人間科学部）

### 1. 問題意識

発表者は，本日の報告の前段階として，「情報サービス演習」の構成要素に対する考察を，西日本図書館学会平成 27 年度秋季研究発表会（2015 年 12 月 5 日，大分市民図書館）において，「「情報サービス演習」の構成モデルに関する研究」と題して研究発表した。その要点の一つが，大谷康晴さんからの趣旨説明にあった，「これからの図書館の在り方検討協力者会議」の『司書資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目の在り方について』に謳われている「情報サービス演習」の位置付けに関連している。すなわち，旧科目の「レファレンスサービス演習」と「情報検索演習」を「発展的に統合」させた運用が行われているかどうかを明らかにすることであった。

具体的には，西日本図書館学会の支部が存在する地域において，司書の養成課程を有する四年制の 19 大学に関する調査をもとにした。結果として，旧来の 2 科目を統合した内容で運用している大学は 1 にとどまり，残り 18 大学は従来の科目区分に基づく運用を続けていることが確認された。こうした状況は，全国的にも同様に見られ，「情報サービス演習」の統合的な構成を検討することは，2012 年度からのカリキュラムの実践における課題の一つと認識することができた。

一方，統合的な構成が目指される「情報検索演習」は，1 科目ではあるものの 2 単位の演習科目であり，授業時間として 60 時間を設けることが必要となる。したがって，セメスター制・半期科目制が主流になっている現在の大学の実状を考慮すると，2 科目に分割して開講することが妥当と考えられる。すなわち，統合的な構成を指向した上で，「レファレンスサービス演習」と「情報検索演習」という区分で用いたのとは異なる規準を想定し，新たな 2 科目を組み立てるのが望ましいという結論を導いた。

以下，こうした問題意識のもと，青山学院大学における実践事例を示す。

**小田光宏氏**

## 2. 演習の種類

まず，上述した組み立てを行うために，「情報サービス演習」で取り上げる可能性のある演習を，関連文献や事例を渉猟し，まず，下記の八つに整理した。

(1) 情報源評価演習
(2) レファレンスコレクション演習
(3) レファレンスインタビュー演習
(4) 質問回答・情報検索演習
(5) レファレンス記録作成・活用演習
(6) 利用案内・指導演習
(7) パスファインダー等作成演習
(8) 情報サービスの計画策定・評価演習

このうち，(1)と(2)，ならびに，(4)と(5)は，それぞれ関係が深い演習内容である。また，(5)は(4)を基本として行うものであり，(6)は(1)ないし(2)を展開させるものと考えられる。さらに，(8)はマネージメントの手法を学ぶものであり，発展的な内容を扱う演習であると認識した。こうした演習間の関係を考慮し，「情報サービス演習」で培う技能は，次の四つが核になると判断した。

(a) 情報源の評価技能（レファレンス情報源の形成）
(b) 情報ニーズの把握技能（レファレンスインタビュー）
(c) 情報源の構築技能（ツール作成）
(d) 情報の検索技能（レファレンス質問処理）

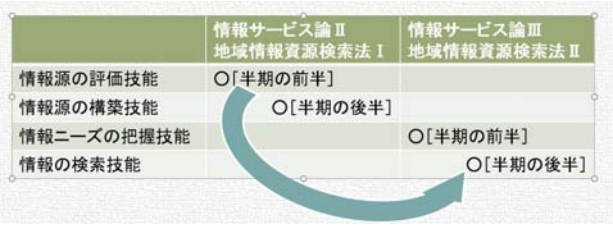
## 3. 科目内での組み合わせ

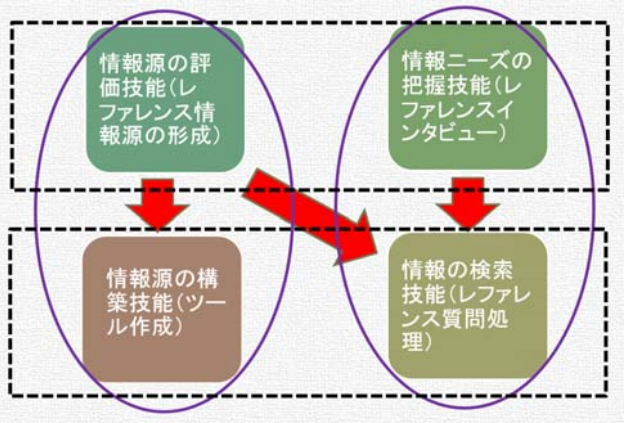
青山学院大学では，2019 年度から，コミュニティ人間科学部を開設し，司書資格を取得できる教育課程を設け，既存の教育人間科学部教育学科が設けている教育課程と，ダブルカリキュラムを提供している。各学部で開設している科目は，下表の通りである。

| 図書館法施行規則 | 教育人間科学部 | コミュニティ人間科学部 |
|---|---|---|
| 情報サービス論 | 情報サービス論Ⅰ | コミュニティ情報資源検索論 |
| 情報サービス演習 | 情報サービス論Ⅱ | 地域情報資源検索法Ⅰ |
| | 情報サービス論Ⅲ | 地域情報資源検索法Ⅱ |

「情報サービス演習」に対応する２科目を，仮に前期に１科目，後期に１科目とした場合，技能を「直線的」に並べて学ぶことになる。言い換えれば，「直線的」に学ぶことによって効果が期待できるものであるのが望ましい。しかし，前述の(a)から(d)の演習の学習の順序に着目すると，実は，(a)→(c)，(a)→(d)，(b)→(d)という時間的な流れが妥当であると考えられた。そこで，前期と後期に１科目ずつではなく，後期に２科目を「並置」し，学生への指導を徹底させて，同時履修を促す方策を用いるようにした。後期を選択したのは，演習の前提である概説科目，つまり，「情報サービス論」を前期に開講するからである。

こうした技能と順序，そして，科目における組み合わせを示したのが，下表ならびに下図である。図において縦長の楕円は，１科目分を意味している。また，点線は，当該科目の前半と後半という順序を表している。




## 4. 授業計画

こうした関係を具体的に授業計画にすると，下記のようになる。ここに示したのは，コミュニティ人間科学部で 2021 年度から開講予定の「地域情報資源検索法Ⅰ」と「地域情報資源検索法Ⅱ」である。

地域情報資源検索法Ⅰ

第１回　情報サービスの設計
第２回　文字・言葉に関する情報源の評価と構築
第３回　事物・事象に関する情報源の評価と構築

第4回　歴史・日時に関する情報源の評価と構築
第5回　地理・地名に関する情報源の評価と構築
第6回　人物・団体に関する情報源の評価と構築
第7回　統計・調査データに関する情報源の評価と構築
第8回　図書・叢書に関する情報源の評価と構築
第9回　雑誌・新聞に関する情報源の評価と構築
第10回　書誌・索引の意義と構造
第11回　書誌・索引の作成プロセス
第12回　書誌・索引の作成事例
第13回　パスファインダーの意義と構造
第14回　パスファインダーの作成プロセス
第15回　パスファインダーの作成事例

地域情報資源検索法Ⅱ
第1回　情報サービスの管理
第2回　質問回答サービスの処理手順
第3回　レファレンスインタビューの留意点
第4回　レファレンスインタビューの理論
第5回　バーバルコミュニケーションの技法
第6回　ノンバーバルコミュニケーションの技法
第7回　レファレンスインタビューの事例
第8回　文字・言葉に関する情報の検索と記録
第9回　事物・事象に関する情報の検索と記録
第10回　歴史・日時に関する情報の検索と記録
第11回　地理・地名に関する情報の検索と記録
第12回　人物・団体に関する情報の検索と記録
第13回　統計・調査データに関する情報の検索と記録
第14回　図書・叢書に関する情報の検索と記録
第15回　雑誌・新聞に関する情報の検索と記録

＜事例報告＞

# 図書館職員による「情報サービス演習」―九州大学における事例―

渡邊 由紀子
（九州大学附属図書館／大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻）

## 1. はじめに

九州大学の事例をもとに，図書館職員による「情報サービス演習」の実践について紹介する。九州大学ではキャンパス統合移転に伴い，2018年10月に中央図書館がグランドオープンした。総面積約2万㎡，座席数約1,400席，収容冊数約350万冊，館内に1,000㎡のアクティブラーニングスペースを持つ，国内最大級を誇る人文社会科学系の大学図書館である。その図書館を利用して司書課程の授業も行われている。

## 2. 九州大学の司書養成課程

九州大学は2012年4月に司書養成課程を開設した。前年の大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻の新設により専任教員 2 名の配置が可能となったことから，約10 年間中断していた司書課程を新カリキュラムのスタートに合わせて復活させた。

課程の運営は文学部司書養成課程運営委員会，事務は文学部の教務担当係が担当し，全学の学部2年生以上及び大学院生が受講可能である。当初は全科目を隔年で開講していたが，予想を上回る受講生が集まり，50 名を超えると実習の授業が難しくなったため，2014 年度から実習科目のみ毎年開講に変更した。

特徴的な点は，図書館職員が，文学部教授会での資格審査を経て，学内非常勤講師として授業を担当していることである。2018 年度現在，表 1 に示す開講科目 16 科目のうち 8 科目（黄色の行）を九州大学の図書館職員が担当している。

## 3. 九州大学における情報サービス実習

### 3.1 担当講師と受講者数

表1に示したとおり，九州大学では「情報サービス演習」2単位を「情報サービス実習Ⅰ」と「情報サービス実習Ⅱ」に分け，それぞれ1単位30時間の集中講義として開講している。「実習Ⅰ」の講師は，実務経験や適性等を考慮して選ばれた図書館職員1名（個人指定）である。2018年度の受講者は，移転の影響もあって例年より少ない17名であった。「実習Ⅱ」の講師は2016年度まで個人指定していたが，当該講師が移転業務で多忙となったため，組織として情報サービス担当部署の職員が担当する方式（職指定）に変更した。2018年度は図書館職員6名がリレー形式で講師を務め，受

表１：九州大学司書養成課程の開講科目（2018 年度）

| 法令科目名 | | 単位数 | 授業科目名 | 単位数 | 時間数 | 時期 | 開講学部 | 講師※ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 必修科目 | 生涯学習概論 | 2 | 生涯学習概論 | 2 | 30 | 毎年・後期 | 教育学部 | 教員（人環） |
| | 図書館概論 | 2 | 図書館概論 | 2 | 30 | 偶数年・後期 | 文学部 | 教員（人文） |
| | 図書館制度・経営論 | 2 | 図書館制度・経営論 | 2 | 30 | 奇数年・前期 | 文学部 | ○ |
| | 図書館情報技術論 | 2 | 図書館情報技術論 | 2 | 30 | 偶数年・前期 | 文学部 | 教員（図） |
| | 図書館サービス概論 | 2 | 図書館サービス概論 | 2 | 30 | 奇数年・前期 | 文学部 | 教員（図） |
| | 情報サービス論 | 2 | 情報サービス論 | 2 | 30 | 偶数年・前期 | 文学部 | ○ |
| | 児童サービス論 | 2 | 児童サービス論 | 2 | 30 | 奇数年・後期 | 文学部 | ◎（学外） |
| | 情報サービス演習 | 2 | 情報サービス実習Ⅰ | 1 | 30 | 毎年・後期・集中 | 文学部 | ◎ |
| | | | 情報サービス実習Ⅱ | 1 | 30 | 毎年・前期・集中 | 文学部 | ◎ |
| | 図書館情報資源概論 | 2 | 図書館情報資源概論 | 2 | 30 | 奇数年・後期 | 文学部 | ○+教員（人文） |
| | 情報資源組織論 | 2 | 情報資源組織論 | 2 | 30 | 偶数年・後期 | 文学部 | ◎ |
| | 情報資源組織演習 | 2 | 情報資源組織実習Ⅰ | 1 | 30 | 毎年・前期・集中 | 文学部 | ◎ |
| | | | 情報資源組織実習Ⅱ | 1 | 30 | 毎年・前期・集中 | 文学部 | ◎ |
| 選択科目 | 図書館基礎特論 | 1 | | | | | | |
| | 図書館サービス特論 | 1 | | | | | | |
| | 図書館情報資源特論 | 1 | 人文学Ⅳ | 2 | 30 | 偶数年・後期 | 文学部 | 教員（人文） |
| | 図書・図書館史 | 1 | 図書・図書館史 | 1 | 15 | 奇数年・後期 | 文学部 | 教員（人文） |
| | 図書館施設論 | 1 | 図書館施設論 | 1 | 15 | 偶数年・前期 | 文学部 | 教員（人環） |
| | 図書館総合演習 | 1 | | | | | | |
| | 図書館実習 | 1 | | | | | | |

※ ○教員兼務の図書館職員，◎図書館職員

講者は 29 名であった。隔年開講の講義科目「情報サービス論」の受講者が 100 名であるのに比べ，毎年開講する実習科目は適正な人数に落ち着いてきた。

### 3.2 「情報サービス実習Ⅰ」の授業概要

「実習Ⅰ」のねらいは，レファレンスサービスのプロセス，及びレファレンサービスにおいて活用すべき各種情報源について実習を通して学び，レファレンスサービスの実践的な能力を養成することであり，質問回答サービスを軸とした内容となっている。

「実習Ⅰ」では冊子体の参考図書を中心に扱う。冊子と電子という媒体で科目を分けた理由は，ⅠとⅡの担当者が異なるため，各科目で扱う範囲を明確化する必要があったこと，開始時点で新カリキュラムに沿ったテキスト類が出揃っていなかったため，旧カリキュラムのテキストを参考に科目を組み立てたことなどである。

授業の進め方は，基本的にレファレンスサービスを模擬体験する実習形式であり，授業の場として講義室と図書館を利用する。教科書は特に指定せず，各回でテーマに応じたレジュメや資料を紙で配布する。成績は中間課題提出（55%）及び最終課題提出（45%）により評価し，課題の受講資格には受講態度（出席状況等）を加味する。

「実習Ⅰ」の授業計画を表 2 に示す。2018 年度は移転のため変則的に 2 期に分けた 5 日間の集中講義となった。

### 3.3 「情報サービス実習Ⅱ」の授業概要

「実習Ⅱ」は，情報検索の基礎的な知識，及び情報サービスにおいて活用すべき各種データベースについて，演習を通して学び，効率的な情報検索の手法を習得することを目標としており，インターネット情報源を中心に扱う。

授業の進め方は，パソコンを用いた演習形式である。九州大学は 2013 年度から BYOD（Bring Your Own Device）体制を導入しており，学生は授業時にパソコンを各自持参する。学内無線 LAN も整備されており，通常の講義室であっても実習に支障は生じない。教科書は特に指定せず，各回のテーマに応じたインターネット情報源を適宜提示する。授業資料は，「九州大学 M2B（みつば）学習支援システム」のひとつである Moodle 上に掲示する。確認テストや課題の提出も全て Moodle を利用し，紙の資料は配布しない。成績は，出席及び受講態度（50%），確認テスト（25%），最終課題提出（25%）により評価し，最終課題はパスファインダー作成である。

表 2：2018 年度「情報サービス実習Ⅰ」の授業計画

| 日程 | 時限 | 会場 | 回 | テーマ | 内容 | 講師 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2018<br>12/26 | 2 | 講義室<br>図書館 | 1 | レファレンスサービス序論<br>レファレンス情報源と参考図書 | オリエンテーション、講義、小テスト（基礎知識）、ペアディスカッション（インターネット情報源）、個人ワーク（レファレンスブックの種類） | 中・参考調査係長H |
| | 3 | 図書館 | 2 | 参考図書の評価 | 講義（参考図書の評価、参考図書評価シート実習手順、蔵書検索デモ） | |
| | 4 | 図書館 | 3 | 参考図書の評価 | 個人ワーク（参考図書評価シートの作成） | |
| 12/27 | 2 | 図書館 | 4 | レファレンス情報源と参考図書<br>参考図書の評価・活用 | 講義（参考図書評価シート作成補足説明、レファレンスツール案内、参考図書活用クイズ手順説明） | |
| | 3 | 図書館 | 5 | 参考図書の評価・活用 | 個人ワーク（参考図書活用クイズ解答票作成） | |
| | 4 | 図書館 | 6 | 参考図書の評価・活用 | 個人ワーク（参考図書活用クイズ解答票作成、参考図書評価シートの作成） | |
| 2019<br>2/19 | 2 | 図書館 | 7 | レファレンスインタヴュー | 講義、ペアディスカッション（ケーススタディ） | |
| | 3 | 図書館 | 8 | レファレンスインタヴュー | 講義、小テスト（インタヴュー要否、質問形式、最終質問を引き出す）、ペアディスカッション（ケーススタディ）、個人ワーク（レファレンス質問の作成） | |
| | 4 | 図書館 | 9 | レファレンスインタヴュー | 個人ワーク（レファレンス質問の作成）、<br>ロールプレイング（レファレンスインタヴュー実技） | |
| 2/20 | 2 | 図書館 | 10 | 探索戦略立案 | 講義、小テスト（レファレンス質問分析の練習問題） | |
| | 3 | 図書館 | 11 | 総合演習 | 講義、個人ワーク（レファレンス記録票の作成） | |
| | 4 | 図書館 | 12 | 総合演習 | 個人ワーク（レファレンス記録票の作成、参考図書評価シートの作成） | |
| 2/21 | 2 | 図書館 | 13 | 総合演習 | 前回からの続き | |
| | 3 | 図書館 | 14 | 総合演習 | 前回からの続き | |
| | 4 | 講義室 | 15 | レファレンス情報源と参考図書<br>総括 | 講義、小テスト（参考図書の知識確認） | |

表 3：2018 年度「情報サービス実習Ⅱ」の授業計画

| 日程 | 時限 | 会場 | 回 | テーマ | 内容 | 講師 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2018<br>9/18 | 1 | 講義室 | 1 | 情報サービスにおける情報検索 | オリエンテーション、情報サービス論と実習Iの復習、インターネット情報源の特性 | 中・図書館専門員A<br>中・eサポート係員B |
| | 2 | 講義室 | 2 | 情報検索の基礎 | 演算子、トランケーション、異体字、ストップワード、上位語・下位語、シソーラス、再現率 | 中・eサポート係員B |
| | 3 | 講義室 | 3 | 所蔵情報の検索（1） | OPACの機能比較 | 医・参考調査係員C |
| | 4 | 講義室 | 4 | 所蔵情報の検索（2） | OPACで探せない資料、横断的な所蔵検索（CiNii Books、Webcat Plus、NDLサーチ、カーリル）、図書館等による資料のデジタル化、検索実習 | 医・参考調査係員C |
| 9/19 | 1 | 講義室 | 5 | 論文情報の検索（1） | 雑誌・論文とは、論文の仕組み、日本語文献を探す（CiNii Articles）、リンクリゾルバ、機関リポジトリ、一般誌の記事を探す（大宅壮一）、検索実習 | 医・参考調査係員D |
| | 2 | 講義室 | 6 | 論文情報の検索（2） | 英語文献をさがす、引用文献データベースとは（WoS、Scopus、Google Scholar）、文献管理ツール、ディスカバリ・サービス、検索実習 | 医・参考調査係員D |
| | 3 | 講義室 | 7 | 情報の信頼性と利用倫理 | 情報の信頼性、情報倫理、検索エンジンの活用方法 | 医・参考調査係員D |
| | 4 | 講義室 | 8 | データベースの検索（1） | 新聞、事柄、歴史、地理 | 伊・DL担当係員E |
| 9/20 | 1 | 講義室 | 9 | データベースの検索（2） | 人物、団体、統計 | 伊・DL担当係員E |
| | 2 | 講義室 | 10 | データベースの検索（3） | 法律、判例、特許、医療 | 伊・DL担当係員E |
| | 3 | 講義室 | 11 | 総合演習（1） | 問題演習 | 医・DL担当係員F |
| | 4 | 講義室 | 12 | 総合演習（2） | 前回からの続き | 医・DL担当係員F |
| 9/21 | 1 | 講義室 | 13 | パスファインダーの作成（1） | パスファインダーの説明、Cute.Guides紹介、課題提示、パスファインダー作成 | 中・eサポート係員B |
| | 2 | 講義室 | 14 | パスファインダーの作成（2） | パスファインダー作成 | 中・eサポート係員B |
| | 3 | 講義室 | 15 | 総括 | 確認テスト、自己評価＆授業評価 | 中・eサポート係員B |

表 3 に示すとおり，2018 年度は中央・医学・伊都の各館から講師を集め，連続 4 日間の集中講義として実施した。

### 3.4 受講者及び講師による評価

まず，終了時の受講者アンケートを見ると，「実習Ⅰ」の良かった点は，「実例をたくさんあげてくれた」「図書館を使っての実習」「授業のことだけでなく司書に関することも伺えて良い機会となった」などであった。悪かった点として，「Moodle などを使って電子化された資料を提供してほしかった」という意見が複数あった。その他，印象に残ったことに「参考図書の面白さを個人的に知れてよかった」という声があった。一方，「実習Ⅱ」の良かった点は，「担当職員が変

わるところ」「Moodle 上でスライドを確認しながら講義を受けれた点」などであり，悪かった点は，「先生によって言っていることが違う」「出席を取るのがまちまち」などであった。その他，「実生活でも役に立ちそうな情報が多々あり，受講してよかった」などの感想もあった。

次に，担当講師による所感と今後の課題を確認する。「実習Ⅰ」では，「今回もレファレンスツールの講義は紙の参考図書を中心に紹介した。しかし，これでは図書館サービスの実態にそぐわなくなってきているため，授業内容を見直す必要がある」と認識していた。「実習Ⅱ」では，「アンケートでの意見にもあるように，講義内容に関する講師間の意見交換の不足が課題である」という反省があった。

これらの課題を解決するために，2019 年度から「実習Ⅰ」の講師である図書館職員（個人指定）が「実習Ⅱ」も担当できるよう講師を変更するとともに，ⅠとⅡのカリキュラムの組み立てを再考することにした。主担当講師の下，他の図書館職員には必要に応じて授業サポートに入ってもらうことを想定し，2 科目ともに M2B 学習支援システムの活用を予定している。

## 4. まとめ

現職の図書館職員が講師を担当する意義は，実務と直結した「ライブ感」にあると考えられる。実践的な授業を通じて，現場から最新情報を提供できること，実務者として学生に司書のロールモデルを直接提示できることなどは，学生にプラスの影響を与えており，教育効果の向上が期待できる。

ただし，大学図書館職員が講師をする際の課題もある。実務経験は十分でも教育経験に乏しいことや，理論的な裏付けよりも実践知が優先されがちなこと，司書課程は公共図書館に関する科目であるのに，その事情について大学図書館ほどには明るくないことなどが懸念される。大学図書館職員が司書課程で教えるためには，実務＋αの知識が必要となっている。

他方，図書館職員が講師を担当する副次的な効果として，司書課程の授業によって学生向けの図書館利用教育の拡充ができることや，直接的な教育活動を通じた図書館職員の人材育成といったことが挙げられる。

**渡邊由紀子氏**

＜事例報告＞

# 「情報サービス演習」のあり方―中央大学における取り組み―

小山 憲司

（中央大学文学部）

## 1. 中央大学文学部の司書課程と図書館情報学教育

中央大学文学部に司書課程が設置されたのは，1981 年 4 月のことである。その後，1990 年 4 月に社会学科社会情報学専攻図書館情報学専修が設置され，専門課程として図書館情報学を履修できるようになった。1995 年 4 月には大学院文学研究科社会情報学専攻修士課程が，1997 年 4 月に大学院文学研究科社会情報学専攻博士後期課程が設置された。現在は，文学部人文社会学科社会情報学専攻図書館情報学コースとして，専任教員 2 名が担当している

専門課程に加え，司書課程も維持されている。2002 年度入学生からは文学部だけでなく，全学の学生が履修できるようになった。なお，履修を希望する学生は，毎年 3 月に実施される選抜試験に合格する必要がある。募集人数は約 30 名である。

表 1 は，本学が開設する司書課程科目の一覧である。表左側が法令科目，右側が本学の授業科目である。法令科目では必修 11 科目 22 単位，選択 2 科目 2 単位，合計 13 科目 24 単位が設定されているが，本学の場合，必修13科目26単位，選択 2 科目 4 単位，合計 15 科目 30 単位を必要単位数としている。

表１　中央大学文学部の司書課程設置科目

| 区分 | 法令科目 | 単位 | 授業科目 | 単位 | 履修方法 |
|---|---|---|---|---|---|
| 必修22単位 | 生涯学習概論 | 2 | 社会教育概論(1) | 2 | 2単位必修 |
| | | | 社会教育概論(2) | 2 | |
| | 図書館概論 | 2 | 図書館情報学概論 | 2 | 必修 |
| | 図書館情報技術論 | 2 | 図書館情報技術論 | 2 | |
| | 図書館制度・経営論 | 2 | 図書館・情報センター経営論 | 2 | |
| | 図書館サービス概論 | 2 | 図書館サービス概論 | 2 | |
| | 情報サービス論 | 2 | 情報サービス論 | 2 | |
| | 児童サービス論 | 2 | 児童サービス論 | 2 | |
| | 情報サービス演習 | 2 | 情報サービス演習(1) | 2 | |
| | | | 情報サービス演習(2) | 2 | |
| | 図書館情報資源概論 | 2 | 図書館情報資源概論 | 2 | |
| | 情報資源組織論 | 2 | 情報資源組織論 | 2 | |
| | 情報資源組織演習 | 2 | 情報資源組織演習(1) | 2 | |
| | | | 情報資源組織演習(2) | 2 | |
| 選択2単位 | 図書館基礎特論 | 1 | 専門資料論(1) | 2 | 4単位必修 |
| | 図書館サービス特論 | 1 | 専門資料論(2) | 2 | |
| | 図書館情報資源特論 | 1 | 記録管理論 | 2 | |
| | 図書・図書館史 | 1 | 図書・図書館史 | 2 | |
| | 図書館施設論 | 1 | | | |
| | 図書館総合演習 | 1 | | | |
| | 図書館実習 | 1 | 図書館情報学実習 | 2 | |

## 2. 中央大学における情報サービス演習

### 2.1 情報サービス演習開講にあたって抱えていた課題

情報サービス演習は，法令科目では１科目２単位として設定されている。しかしながら，演習科目という性質上，半期２科目ないしは通年科目としてこれを設置する大学がほとんであると思われる。また，図書館法施行規則の改正に伴って2012 年４月より施行された「図書館に関する科目」により，旧科目であるレファレンスサービス演習と情報サービス演習との読み替えを考えなくてはならなくなった。本学では，前者を情報サービス演習(1)として前期に，後者を情報サービス演習(2)として後期に，それぞれ旧科目との読み替えを可能とし，半期科目（2 単位）として開講してきた。その結果，情報サービス演習(1)では冊子体の情報資源を中心とした情報サービスを，同(2)では電子情報資源を中心とした情報サービスを扱うことになった。同様の対応は，多くの司書課程開講大学でとられたものと考えられる。

しかし，情報社会の進展により，レファレンスサービスをはじめとする情報サービス，ひいては図書館サービスの電子化が進むなか，冊子体と電子情報資源とを区分して授業計画を組み立てることは困難になってきた。また，実務においてもそうした区分けは意味をなさなくなってきている。本学では，それぞれの科目を別の教員が担当していたこともあり，内容の重複が懸念された。

担当いただいていた教員２名はお互いに情報交換し，授業計画に反映していた。具体的には，情報サービス演習(1)ではレファレンスインタビューをはじめとするコミュニケーション技術，発信型情報サービス，レファレンスコレクションの構築を扱うほか，冊子体も重視するが商用データベースも積極的に活用していた。他方，情報サービス演習(2)では情報検索の理論や手法，評価に力点を置き，無料のデータベースを中心に扱っていた。その結果，ある一定程度の重複は解消できたが，こうした対応では限界があることも確認された。

### 2.2 課題への対応

そこで，2018 年度に担当教員を１名として，各科目の内容を構成し直していただいた。その結果，情報サービス演習(1)は基礎編と位置づけ，「情報サービスの各種業務を理解した上で，利用者の質問に対するレファレンスサービスや情報検索サービスのプロセスや技法，主要な情報資源の知識と検索方法を習得する。演習に使用する情報資源は冊子体のレファレンス資料，インターネット上の情報資源に加えて，基本的な商用データベースも含む。」といった内容とした。同(2)は応用編として，「情報サービス演習(1)で学んだ基本的な情報資源に加えて，より多様な情報資源の知識と検索方法を習得し，レファレンス質問回答演習に取り組む。演習に使用する情報資源は冊子体のレファレンス資料，インターネット上の情報検索サービスに加えて，商用データベースも含む。また情報サービスの設計，評価や発信型情報サービスについても演習を通して実践的な能力を養成する」こととした。

表２　2018 年度の情報サービス演習(1)および(2)

| 回 | 情報サービス演習(1) | 情報サービス演習(2) |
|---|---|---|
| 1 | 情報サービスの全体像<br>レファレン情報資源の種類と特徴 | 情報サービスの体制作り |
| 2 | 情報検索の仕組み<br>情報検索サービスのプロセス | 図書、雑誌記事の探し方<br>（情報サービス演習(1)）の展開） |
| 3 | レファレンスサービスの類型とプロセス<br>インタビューの技法 | 新聞記事の探し方<br>（「情報サービス演習(1)」の展開） |
| 4 | 図書情報の探し方（目録、書誌） | 言葉・事柄、歴史・地理、人物・団体の探し方<br>（情報サービス演習(1)）の展開） |
| 5 | 図書情報の探し方（出版情報、電子図書館） | 企業情報の探し方 |
| 6 | 雑誌および雑誌記事の探し方（雑誌記事索引） | 統計の探し方 |
| 7 | 雑誌および雑誌記事の探し方（電子ジャーナル） | 法令・判例の探し方 |
| 8 | 新聞および新聞記事の探し方 | レファレンス質問回答演習（案内指示型） |
| 9 | 情報資源、およびWebサイトの探し方 | レファレンス質問回答演習（事実解説型） |
| 10 | 言葉・事柄の探し方（電子情報資源） | レファレンス質問回答演習（総合） |
| 11 | 言葉・事柄の探し方（冊子体） | 発信型情報サービスの種類と概要 |
| 12 | 歴史・地理の探し方 | パスファインダーの作成 |
| 13 | 人物・団体の探し方 | レファレンスコレクションの構築と評価 |
| 14 | 総合演習 | 情報サービスの設計と評価 |
| 15 | まとめ | まとめ |

表2は，2018年度の情報サービス演習(1)および(2)の授業計画である。前期科目である情報サービス演習(1)で情報サービス論で学ぶ情報サービスの基本を抑えつつ，各種情報資源を用いた情報検索の実習が展開されている。後期の情報サービス演習(2)の前半では，同(1)で実習した情報検索を基礎とした応用課題が扱われているほか，発信型情報サービスや情報サービスの設計と評価など，2科目のまとめとしての回を充実させることができた。

### 3. まとめ

人事をきっかけとしてではあったが，担当者を一人にし，司書課程担当教員からの要望を適切に伝えたことにより，これまで懸念されていた情報サービス演習(1)および(2)の内容の重複という課題は大きく改善された。同時に，両科目の有機的な連携も実現できたことは，大きな成果であったと言える。

ただし，本学では別の課題を抱えている。1つは授業環境による制約である。両科目ともPCを用いた実習が欠かせないため，PC教室での授業時間枠を確保する必要がある。しかし，文学部内のPC教室の定員は最大60名のため，これを超える受講者があった場合の対応を考えておかなくてはならない。専門課程である図書館情報学コースには毎年20名から30名程度の学生が入学する。また，司書課程では毎年約30名を受け入れている。3年次以上の学生が受講した場合には，受講生が60名を超える恐れがあるため，本科目のみ週に2回，同一内容の授業を開講せざるを得ない状況である。

別の課題として，専門課程と司書課程との共存が挙げられる。現在，2021年にカリキュラム改訂を控え作業を進めているが，専門課程としての図書館情報学教育と司書課程の科目群をどのように配置し，あるいは位置づけていくかが大きな課題となっている。それは，開講できる科目数に限りがあることにも関連する。図書館情報学コースのカリキュラムという枠組みを見据えながら，検討を重ねているところである。

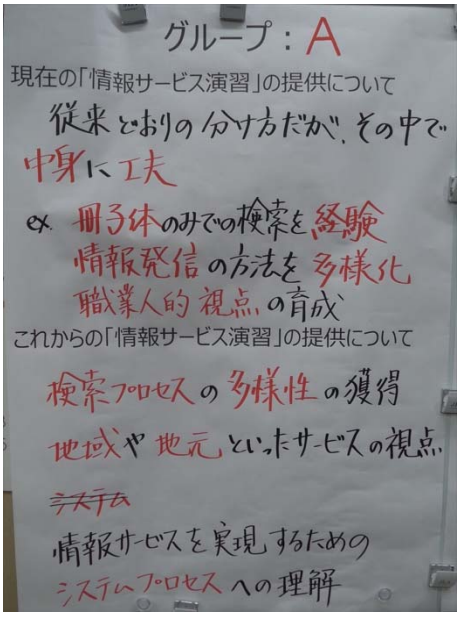
**小山憲司氏**

## ワークショップ（概要）

グループディスカッションでは，最初に図書館情報学教育部会幹事の大谷康晴氏より，ワークショップの趣旨と手順について説明があった。その後，参加者はAからEの5班に分かれて，各大学の実践事例について報告したほか，これからの情報サービス演習の提供について意見交換した。続いて，班毎に模造紙1枚に検討結果をまとめ，その資料をもとに発表した。以下，各班からの発表内容である。

**グループA**：1つめの現在の科目についてであるが，構成は従来どおり，レファレンスサービスと情報検索の2つであるが，内容を工夫している。例えば冊子体のみでの検索をあえて経験させたり，情報発信の方法が多様化しているので冊子体と電子媒体の両方を用いることで情報を精査させたり，逆に両方の方法を用いた情報発信に取り組ませたりしている。また，参加者の大学ではカリキュラムの性質上卒業要件の単位科目にもなっており，それに合わせて職業人としての能力の育成といったことも視野に入れている。

これからについてさまざまな意見が出たが，まず大事なのは検索プロセスの多様性の獲得である。プロセスに重点を置くべきとの意見が出た。また，レファレンス質問の課題が多

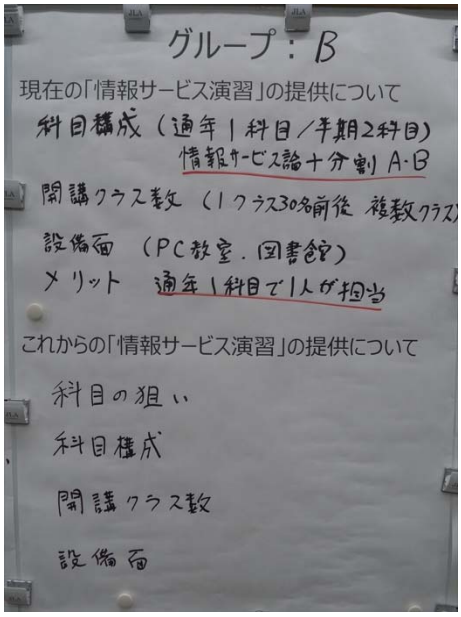



グループ A の成果

くのテキストで示されているが，地域や地元といったサービスの視点が欠けているのではないかという指摘があった。これをテキストに入れるのは難しいが，例えば地元指向の課題を学生自身が考えて解決する手法を開発する，そのときに図書館だけでなく地域のさまざまな資源を用いて解決するといったやり方があるのではないか。最後に，最近は検索と言えば検索エンジンなどでキーワードを入れればすぐに結果が得られるが，その裏側はどのようになっているかを知ることが大切であるし，それが情報を上手に検索できることに繋がると考える。図書館情報技術論と重なる部分ではあるが，情報サービスを実現するためにシステムプロセスを理解するといった別の視点も必要であると考える。

**グループ B**：まず科目構成であるが，大学によって通年 1 科目のところもあれば，半期 2 科目のところもあった。なお，ここでいう半期 2 科目には同じ学期に 5・6 時間目の 2 時間連続で開講している大学もある。大学によって履修条件も異なっている。例えば，情報サービス論を履修してからが望ましいと推奨する大学もあれば，演習科目のうち，冊子体を扱う科目では情報サービス論の履修が前提となっているが，データベース検索は条件を設けていないといった大学もあった。開講クラス数も大学によるが，おおよそ 1 クラス 30 名前後で，複数クラス開講しているところもある。設備面で，PC 教室を使えないという大学はなかった。現在の科目運営で特にデメリットはなく，通年 1 科目を 1 人が担当することは柔軟に対応できるという点でメリットであるという意見があった。

これからについては十分議論はできなかったが，まず大学で教えている限りでは商用データベースを使えるが，市町村図書館に就職したり，実習に行った場合に必ずしも商用データベースが使えるわけではないという点が課題である。また，学生は電子環境に慣れており，冊子体を用いた演習を敬遠する傾向にあるが，冊子体の有効性をきちんと学生に伝えるべきである。最近では科目ナンバリングやカリキュラムツリー，シラバスチェックなど，質保証が進められており，これに対応していく必要もある。

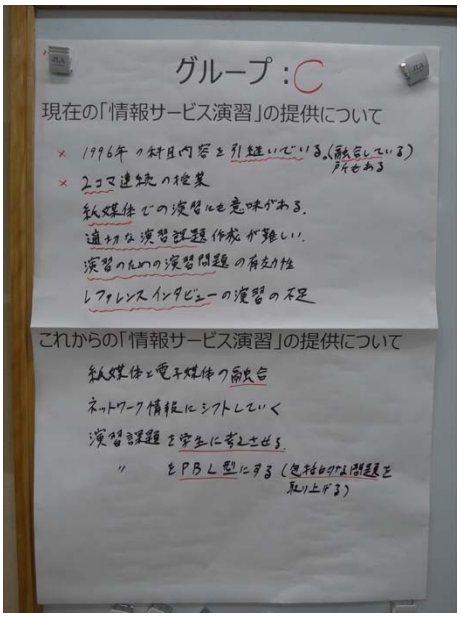



グループ B の成果

**グループ C**：現在の状況について，1996 年の科目内容を引き継いでいる大学も多かったが，一部融合している大学もある。B グループと同様，2 コマ連続で授業を行っている大学もある。続いて，紙媒体での演習は必要かという議論になったが，概ねそうした演習にも意味があるだろうという結論となった。適切な演習問題を毎年作成していくことが困難であったり，それを学生が共有してしまったりするという問題点も紹介された。また，演習のための演習問題になってしまい，とても複雑な問題になっており，その有効性が疑問視された。実際のレファレンスに近いレファレンスインタビューの経験を積ませたいが，その演習が不足していることも問題点と

して挙がった。

これに対して，これからの科目はどうあるべきかを考えたところ，まず紙媒体と電子媒体の融合は避けられないので両者を合わせていく，特にネットワーク情報資源にシフトしてくべきではないかという意見が出た。また，演習問題を作成するのが難しいという課題について，学生に問題を考えさせてはどうかという意見が出た。これまで教員が冊子体を使って調べさせていた問題を，学生に冊子体でしか探せない問題を作らせてみて，それを蓄積していくといったこともできる。学生間で共有されてしまうという問題については，前年に提出された良問は最初に学生に公開することで，別の問題を作成させるといった方策が考えられる。評価も学生同士にやってもらうなどすれば，アクティブラーニングの要素を追加できる。PBL（Project-Based Learning）型にする方法も考えた。なにか１つの正解を見つけるのではなく，包括的な問題，例えば起業する人に対する支援はどうするかとか医療問題とかといったことを問題として取り上げ，PBL として進めるといった意見が挙がった。

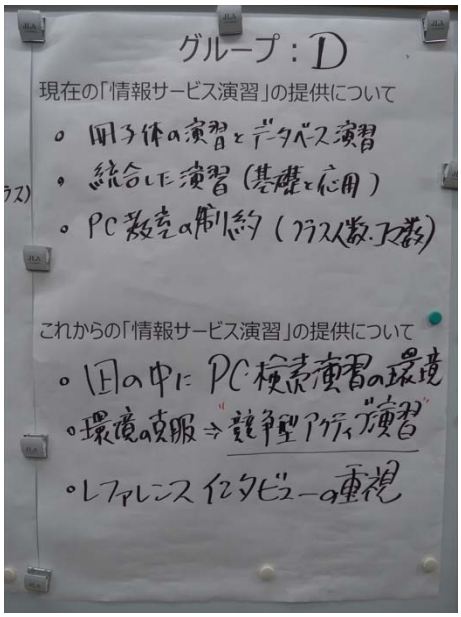



グループＣの成果

**グループＤ**：４大学のうち３大学で，冊子体の演習とデータベース演習という従来どおりの科目構成をとっていた。残りの１大学は基礎と応用で分けることで，統合した演習という形であった。どのような形で提供されているかは置かれている状況，すなわち PC 教室の人数，専門科目としての位置づけなどに依存しており，それらに合わせてできる限りのことをしている。

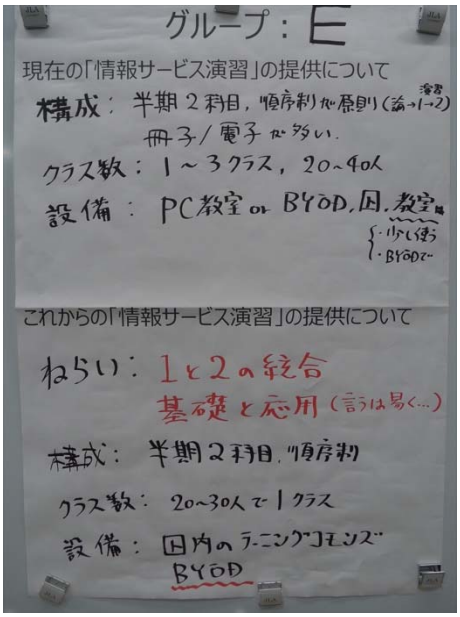
これからの提供にあたっては，図書館の中に PC 検索演習ができる環境を整備し，データベースも使え，冊子体も近くにあるというように，できる限り学習環境の身近にコンテンツを集めて演習ができることが望ましい。また，学習環境に制約がある場合でも，教育方法の工夫で乗り越えられることもある。例えば，１つの課題を２つのグループに取り組ませて，最後にどちらがよいか評価させるといった，アクティブラーニングを取り入れた競争型アクティブ演習というアイディアも出た。最後に，コンテンツの提供だけでなく，図書館員が利用者からどのように情報要求を聞き取り，回答を得るのか，また利用者の情報ニーズをどのようにすくい上げて対応をしていくのかといったことを踏まえた演習を目指すためには，レファレンスインタビューを重視すべきではないかといった意見が出た。

競争型アクティブ演習について補足したい。これはクラスを２つに分けて，１つは図書館で冊子体を使って，もう１つはパソコン教室でデータベースを使って，同じ課題を探索させ，その２つを報告させ，比較させるというものである。課題によっては冊子体の方が適している場合もあるし，データベースでないとだめだということもある。この方法を使えば情報源の評価までを行えるというものである。




グループＤの成果

**グループ E**：いずれの大学も半期 2 科目で前後期に開講していた。その際，情報サービス論の次に演習 1 を，その次に演習 2 をといったように順序性を原則としていた。ただし，1 大学はいずれから履修することもできるようになっているが，その場合，学生から内容が重複しているとの指摘があるとのことであった。内容は，冊子を中心としたものと検索を中心としたものの 2 つに分かれている。冊子を前期に扱い，後期に電子を中心に行うが冊子も組み合わせるという流れが一般的であったが，1 大学だけ電子を前期に行っていた。電子を前期に行い，後期に冊子を扱うと，学生からは不評であるという報告もあった。クラス数は受講者人数に応じて分けられていて，1 クラスから 3 クラスであった。演習の場所は，PC 教室の大学もあれば，BYOD で対応している大学もある。冊子体の演習は図書館，教室，ラーニングコモンズで行うといった事例が紹介された。ラーニングコモンズでは他の学生の迷惑にならないような授業ができる設備が必要であったり，教室で行うと図書館と遠く離れてしまうので移動の問題があるといった意見もあった。




**グループ E の成果**

これからについて，まず科目内容としては，現在引きずっている 1 と 2 を何とか統合したほうがよいだろうという点で意見は一致した。例えば基礎と応用といったことが考えられるが，では基礎とは何だろう，応用は何を指すのかといったところが不明確な点が課題である。また，図書館内にラーニングコモンズがあったり，BYOD で授業できる環境が整っていたりすることが望ましいが，それは我々の努力で解決できない部分でもあるのではないかといったことが話題に上った。

**ディスカッション**：

**西尾（龍谷大学）**：グループ D の競争型アクティブ演習についての質問である。1 グループ何名くらいを想定しているか。

**下田（藤女子大学）**：1 クラス 60 名前後の演習で PC 教室の収容人数という制約条件を克服するための方法として考えた。その条件にもよるし，担当教員の考えによっても変わるだろう。

**小田**：グループ B への質問である。5・6 時間目を使った授業というのは，半期で 1 科目，演習 2 単位分という理解でよいか。

**坂本（京都女子大学）**：そのとおりである。

**大谷**：グループ E で，電子を前期に行い，後期に冊子を扱うと，学生からは不評であるという報告があったが，一方で現在の学生の行動からすれば，両方使えるのであればまずは電子からというのが一般的であろう。多くの大学で冊子体を扱ってから電子情報資源を扱うという流れになっていて，それはそれで合理性があるが，学生にこの点がうまく伝わっていない気もするが，いかがか。

**斎藤（清泉女子大学）**：担当者である発表者の技量の問題かもしれないが，学生にある特定の冊子体のツールを使って調べてくるような課題は熱心に取り組むが，レファレンス質問に合わせて自分でツールを選び調べてくるように指示するとお手上げということになることがある。そうした課題をこなすためには，さまざまな複合的な知識が必要なのであろう。ただし，科目内容の性格上，レファレンスインタビューやパスファインダーなど，ほかにも扱わなければならないものがあり，十分に時間が取れない中で課題に取り組ませざるを得ないというところに問題点があると考える。もう 1 つは，冊子体のレファレンスツールが以前は豊富に揃っていたが，最近は購入が難しくなっており，ツールそのものの不足もあると感じている。

**大谷**：省令科目では 1 つであるにもかかわらず，カリキュラム表上は 2 科目設定していることについてどう考えるか。今後，省令科目の改正が図られるときには論点の 1 つになる。

過去の事例からすると，検討会議ではもともと情報サービス演習は半期2単位15コマのイメージであった。しかし，文部科学省からは最後の最後に演習は 1 単位であるという話があった。単位ではなく時間で指定できないかということも意見したが，単位制度の運用が主であるとの回答であった。こうした事情もあり，結果，通年2単位60時間分の科目を設定するという流れが一方であった。他方，半期2科目で実施する大学も数多くある。

**小田**：半期というよりも，1科目で実施するのか，2科目に分割して実施するのかという視点からの議論がよいのではないか。

**坂本**：本学の場合，情報サービス論を前提として演習を実施している。専任教員が2名いるが，サービス系の科目は一人の教員がすべて担当することになっている。内容重複のことも考えると，一人が連続2時間で半期1科目を実施するほうが内容にも柔軟に対応できてよいのではないかと考えている。

**小山**：演習科目を2つに分けて実施するときに，同じ学期に2科目開講するパターンと前期後期に実施するパターンがあった。情報サービス論が履修済みであることを前提とした場合，カリキュラムの制約が大きくなるが，学生はあまり制約をかけないでほしいと考えている。こうした制約によって，学生が履修したくても履修できない状況を生み出してしまう可能性があり，その点で教員としてプレッシャーを感じる。また，大谷先生の報告にもあったが，教職課程を扱う課が司書課程をも扱うことになったら，こうした制約を文部科学省として課してくる可能性もある。運用の難しさを感じている。

**大谷**：本学の場合，情報サービス論は2年生，情報サービス演習は3年生から履修できるようにしている。学生からは不評であるが。

**斎藤**：電子を先で冊子を後にすることに問題もあることを報告したが，一部の学生は熱心で，データベースで調べられないこともあることに対して積極的な気づきを得ている者もいる。効率的なことはもちろん，上手に組み合わせることが大切であると思うので，こうした方法も悪くないのではないかとも感じた。

**岡田（相愛大学）**：冊子と電子のように2科目に分けることはベストではない。そこで切れ目を入れるか，1科目で実施せざるを得なくなるからである。理論と応用といった別の分け方も模索すべきで，冊子と電子で分けることの教育的効果といったことがないままに分けるのは適切ではないのではないか。

**下田**：この意見に賛同する。そもそも情報源の媒体が違うだけで，やるべき仕事は同じなのであるから，例えば情報の探索とか検索など，プロセスに重きを置いた方がよい。また，図書館情報技術論で基本的なことを学んでおり，情報サービス演習ではそれを前提とできるので，冊子と電子の区分けはしないほうがよい。1科目でできるかと言えば，両方を含めた展開は難しいと想像する。たとえ可能な限り，冊子体と電子媒体の情報源を一緒に紹介するとしても，片方の授業ではそれだけで終わってしまう。実際に学生が使えるようになるのかと言えば，そうとも言えず，何か使ってやってみただけで終わってしまうように感じている。最後に，演習課題を学生たちに考えさせる方法だが本学でも，自分の調べたいテーマをいろいろなデータベースで検索させた。国文学の学生のテーマも，あえて医学のデータベースで検索させると、意外な発見もあるなど副次的な成果もあった。自分自身のテーマでやることでデータベースの使い方や中身の理解がより深まるという効果が得られたと考える。

**小山**：グループＡは3名が教員，1名が市民の立場から参加いただいた。私たち教員は省令科目に沿って作られたテキストにしたがって授業を展開することが多いが，逆にこれによって自分たち自身で制約ないしは枠組みを作ってしまう可能性が否定できない。その枠組みを超えたカリキュラムを考える上で，今日参加いただいた方からは地域や地元，生活といった視点が公共図書館にとっては重要ではないかという指摘があった。テキストに掲載されている演習問題にはなかなかそうしたものを入れられないであろうし，具体的にそうした情報サービスにどう対処するのかということについて教えてはいるかもしれないが，十分とはいかないかもしれない。また，情報サービスをはじめ，図書館での活動は仕事そのものであり，その仕事のやり方に関する能力や知識，技術を身につけることもまた重要で，グループＡで紹介した職業人的視点とはそれを指している。演習科目であるという特徴を生かし，仕事への取り組み方や，グループでのコミュニケーションのとり方といったことを授業に取り入れてもいい

のかもしれないと感じた。

**北川（大阪樟蔭女子大学）**：短期大学における 2 年間という制約の中で行っている。半期 2 科目を別の教員と担当することで，情報サービス論，演習 2 科目を同じ学期に並行して開講している。理論も教えながら，それに合わせて演習を実施するという方法があることも伝えておきたい。また，今日の研究集会では出なかったが，シラバスには目標を記載し，それに合わせて成績評価を行っている。図書館界として，この科目で何を学ばせるのかという点で目標を共通化していく方がよいのではないかと考える。各大学の事情によるところもあるかもしれないが，最終的に身につけるものは共通しているようにも思う。今後の検討課題の 1 つであると考える。評価という点とも合わせて検討していただきたい。

**大谷**：省令科目の基本的な目標として何ができるようになるのかという視点は共有できるのではないか。

**まとめ**：

ワークショップの最後に，下田氏から次のコメントがあった。

幹事として研究集会に参加し，毎回たくさんのお土産を持って帰ることができるが，今日も私自身が科目を担当していたこともあり，多くのことを考えさせられ，足りなかったと感じることも少なくなかった。これからも授業について会員のみなさんと一緒に考えていけたらと思う。幹事を務めたこの 4 年の間に，こうした機会が増えてきていると思うので，来期も同様に歩みを進めていけたらと考える。ありがとうございました。

（記録：小山憲司）

---

～参加者の感想～

## 情報サービス演習の課題とこれから

髙田 淳子

（獨協大学等非常勤講師）

2017 年に部会に入会し今回初めて研究集会に参加させていただいた。現在 2 校で非常勤講師として情報サービス演習を担当している。私は 2016 年度まで，県立の高校や公共図書館の司書として実務に携わっていた。レファレンス業務の担当が長く，学校司書や市町村立図書館職員を対象とするレファレンス研修や県民向けの調べ方講座の講師を務めることも業務の一つであった。

情報サービス演習は，実際には 2 つの科目に分割して開講されていることが多く，担当者も別である場合もある。図書館のカウンターでは，紙媒体とインターネット情報等の多様な情報源を複合的に組み合わせることが日常となっており，その狭間で授業展開の方法を模索している。研究集会が何かの手掛かりになればとも考えていた。

研究集会では，最初に大谷先生から趣旨説明として情報サービス演習の変遷について説明があった。歴史的経過と生じている課題との関連について理解することができた。次に青山学院大学，九州大学，中央大学における取り組みの事例報告がなされた。各大学ではさまざまな諸条件の中で，よりよい方策が試行錯誤されている。その後のワークショップでは，4 名程度の少人数のグループで情報サービス演習の提供について望ましい組み立てを検討し，各グループによる検討結果の全体発表が行われた。限られた時間であり，これからの情報サービス演習の望ましい組み立てが見出されるには至らなかったが，意見交換，情報交換の機会を得た。同じ科目を担当する方々と話す機会がこれまであまりなかったので，視野が広がった。

図書館の館種や規模による情報環境の違いもあり，これからもさまざまな角度からの議論や検討が必要とされるがよりよい方向に集約されていくことを期待している。

研究集会の開催のために尽力された諸先生方に改めて感謝申し上げたい。

## 参加者のアンケートから

| | |
|---|---|
| 回収数 | 18 |

質問１　所属

| | |
|---|---|
| 図書館情報学教育部会会員 | 16 |
| 教育部会以外の日本図書館協会会員 | 0 |
| その他 | 2 |

質問２　テーマの設定

| | |
|---|---|
| 適切であった | 18 |
| 適切ではなかった | 0 |
| どちらともいえない | 0 |

質問３　研究集会のプログラムの設定

| | |
|---|---|
| 適切であった | 18 |
| 適切ではなかった | 0 |
| どちらともいえない | 0 |

質問４　研究集会の内容

| | |
|---|---|
| 適切であった | 18 |
| 適切ではなかった | 0 |
| どちらともいえない | 0 |

質問５　今回の研究集会に関するご意見

- 将来の運営や課題についてどの大学も共通していることがわかった。
- 将来について各々の大学での環境，取り組みをお伺いすることが出来て参考になった。
- 多様な現場意見がわかってよかった。
- グループワークで意見交換をする機会は大切（2）。
- 情報サービス演習を担当しておりませんが大変参考になりました。
- 他大学の事例，大いに参考になりました。
- 大変勉強になりました。ありがとうございました。
- 大変参考になりました。ありがとうございました。
- 十分に意見交換が出来たと思います。
- もう少し早くスタートしても良かったのではないか。

質問６「図書館情報学教育 FD プログラム」に対するご意見

- 今後も続けて欲しい。
- 使い方をもっと PR しては？
- どういった司書・図書館員像が必要とされているかといった視点（ニーズ側）を入れた検討が重要。
- 全員が司書になれるわけではないが，司書課程の経験が社会人の活躍に役立つという視点からの全体のカリキュラム
- グループワークは他大学の様子が分かりとても良かったです。
- シラバスにおいて，授業目標と成績評価の関連，目標の標準化等について FD をしてほしい。
- 若い方にももっと来てもらえるようになればいいと思います。
- 情報資源組織演習でやってください。

質問７　教育部会の活動全般に対するご意見

- 年間をとおしてのテーマ設定も良いかも。
- 個人として門外漢でしたが運営面でご配慮頂きありがとうございました
- また図書館見学を組み合わせた研究集会の企画。
- 行事案内のところに毎回参加費を掲載していただけると助かります。
- いつもありがとうございます。

編集担当　〒192-0393　東京都八王子市東中野 742-1　中央大学文学部　小山 憲司
Tel. 042-674-3731　E-mail：koyama@tamacc.chuo-u.ac.jp